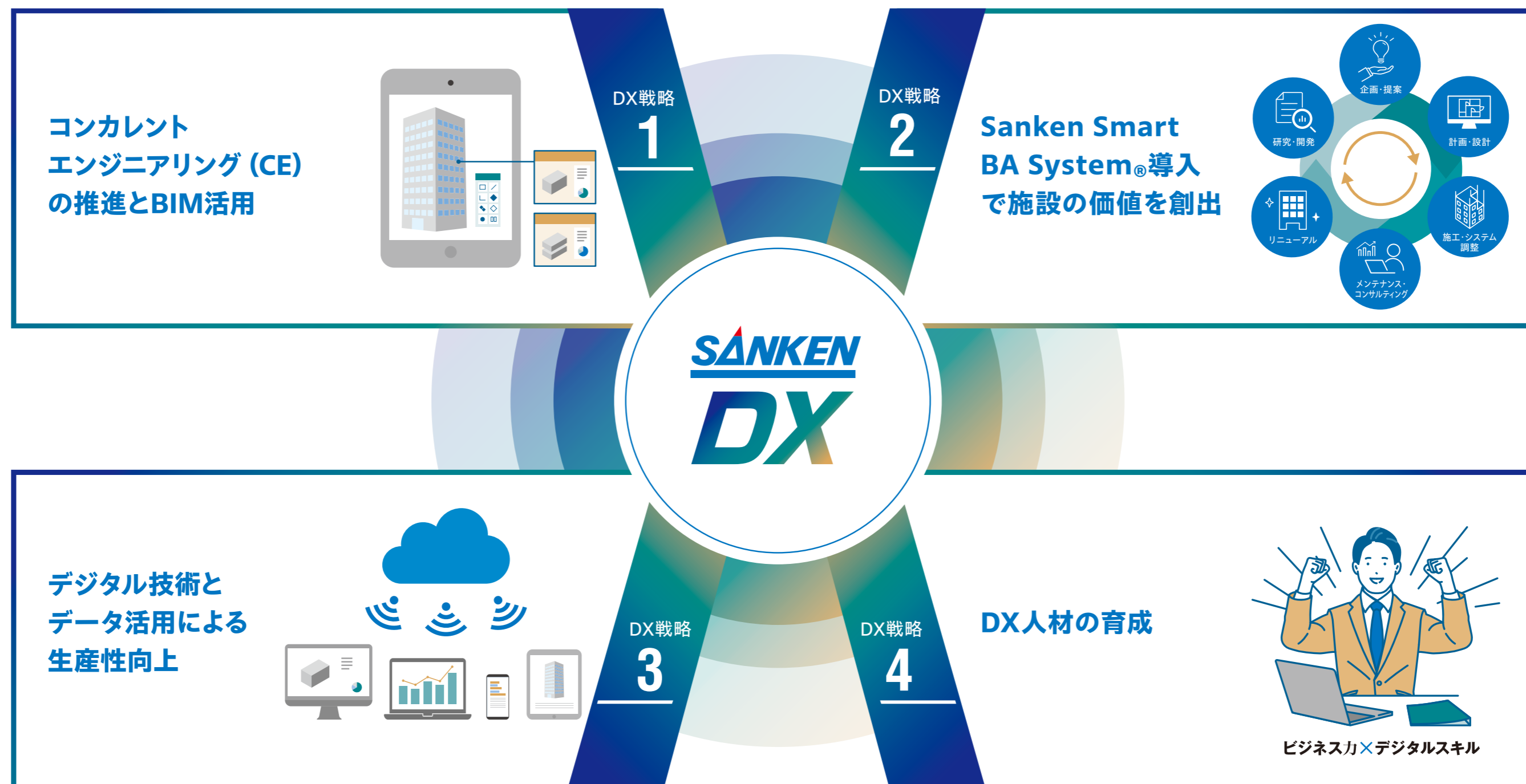


SANKEN DX デジタルデータによるビジネス変革

生産性向上や外部環境変化に対応したビジネスモデル革新のために、デジタルトランスフォーメーション(DX)は欠かせない要素です。

三建設備工業では、DX推進に向けて社員全員が取り組みを加速しています。



DXレポートはこちらからご覧ください <https://skk.jp/corporate/report/?tabsid=2>

当社のDX戦略について

デジタルによる変革を具体化するアプローチとして注目されるデジタルトランスフォーメーション（DX）。三建設備工業は独自の知見を生かしたDXを推進しています。常務執行役員 技術統括本部長であり、DX推進室長の小柳雄司さんに、当社のDX戦略について聞きました。



常務執行役員 技術統括本部長
兼 DX推進室長
おやなぎ ゆうじ
小柳 雄司

まず「DX」と「ICTの活用」の違いは、どのように考えていますか？

ICTは情報通信技術のことで、コンピューターやネットワーク技術を用いた業務の効率化や情報の共有、保管等のことを指します。一方DXはデジタル技術を活用し、業務プロセスの改善および組織、企業文化、風土をも改革し、企業の競争力を高めることを目指すものです。DXは単なるICTの活用ではなく、経営戦略の観点から変革することで効果を発揮します。

DXを推進する背景には何があるのでしょうか？

近年の温室効果ガスの増加による気候変動や、戦争に起因するエネルギー危機など、外部環境は厳しさを増しています。また建設業は少子高齢化による労働人口の減少と長時間労働の常態化が問題となっています。さらに2024年4月から時間外労働の上限規制が始まり、従来の業務プロセスでは、対応は困難と考えています。課題の解決や事業を継続するためにもDXを推進します。

三建設備工業が進めているDX戦略をお聞かせください

当社の策定を示したSANKEN Challenge 2030から4項目をDX戦略としています。どの戦略も私たち自身の意識改革による業務プロセスや文化、風土の変革への取り組みです。

戦略の一つ目は、コンカレントエンジニアリング（CE）の推進です。CEの実践は、設計時に上流工程から下流工程に至る業務全体の知識やスキルが必要です。さらにBIMとICTの活用により施工管理業務は、担当者の知識と経験に頼った業務からデータベースによ

る管理へ変革します。

二つ目は、Sanken Smart BA System[®]（SSBS）の導入です。SSBSは、通信プロトコルのオープン化によるフルオープンシステムであり、多様なデバイスとソフトを自在に組み合わせ、機能とコスト面で優れたシステムとして提供します。また、修繕や改修コストを安価に抑えています。そのため、お客様にはファシリティーマネジメントのお役に立てる仕組みを提供できます。そのために、中央監視や自動制御、ICT、通信、クラウド利用の知識を習得し、システムインテグレータの育成を進めています。

三つ目は、業務プロセスを変革し、生産性向上を実現することです。施工、品質、安全情報をクラウド上に収集します。独自の検索システムにより多くを学び知識を増やし、CS活動に役立てます。またBIMデータは、カーボンニュートラル社会に向けてCO2排出量の提示を可能とし、設備システムや運用の改善による排出量削減を提案します。

四つ目は、DX人材の育成です。DXの推進にはデジタルスキルを習得しビジネス力を発揮するプロフェッショナル社員の育成が必須です。そのため、社員の階層別教育や業務ローテーションを実施し、DX推進リーダーにより、戦略的にDX人材の育成を進めます。

三建設備工業が考えるDXによって「達成する姿」とはなんのでしょうか？

DXの推進により、CS活動強化による直接受注の拡大、マルチスキル社員によるコンカレントエンジニアリングの推進、機能と品質向上による顧客信頼の獲得、全般業務平準化によるワークライフバランスの確保を実現することです。

また、サプライチェーンの皆様と共に進める持続可能な発展と、当社の経営目標の達成においても、DXは必須と考えています。